2003/12/12 石塚秀雄

葦牙（○○）巻頭言

# 曖昧主義の蔓延

イラクで日本の外交官２名が殺害された。それを大きく報道する新聞の紙面の隅には、コロンビアでゲリラに２年あまり誘拐されていた日本人商社マンの遺骸が帰国したという記事が小さく載っていた。世間の関心の重点は新聞の紙面の面積に比例するのであろう。人の死に軽重はない筈であるが。昔、上野動物園のパンダの死亡記事は大きく掲載され、落語家の三遊亭円生の死はその下に小さく載っていたことを思いだす。人は感情移入できるものに対しては大きく感応するのであろう。

死んだ外交官の親戚が「その死を誇りに思う」とテレビで語っていたが、まるで、戦前の「名誉の戦死を遂げた兵隊」の遺族の発言と同質ではないか。新聞の取り上げ方も、死んだ外交官たちを「外交官美談」で盛り上げている。新聞が世論をことさらセンセーショナルな方向に煽るのは、まさに戦前、戦中の新聞のやってきたことと同じではないか。社説や識者の論壇などでも低劣で目に余るものも最近目立つ。新聞のオブスカランティズム（曖昧主義・二股主義）は、ますますひどくなってきているようだ。しかし、それは日本社会の反映にしかすぎないことも確かである。

外国の新聞を読むと、自民党をつぶすという小泉首相をどのようなロジックで国民の多くが支持するのかが理解できなくて困惑を示した記事がいくつかあった。今の首相や外相などの発言は、曖昧主義の最たるもので、なにも実質的なものがなく、まともなロジックがない。こうした発言形態に国民の多くが痛痒を感じないとすれば、国民のオブスカンランティズムも相当重症である。日本人はロジックを軽視する風習があると外国紙が考えるのも当然だ。憲法に対する評価や姿勢にも同じ症状が現れている。護憲と改憲といういずれの立場も第９条にしか

注目していない。条文の曖昧さをなくすのだったら、いっそ、最近のプレゼンテーション方式のように、項目箇条書きにすれば、ご都合主義的な解釈による揺れは少なくなるだろう。

私は昔から原理的「改憲論者」であり、憲法の中で「民主主義」という言葉を使うこと、第１条の国民主権を優先的に明示すること、第２５条など国民の社会権・経済権利の充実拡充などがとくに必要だと考えている。戦後６０年近くのパラダイム転換の時期に日本はさしかかっている。